

〔学術論文〕

保育者養成校におけるアクティブ・ラーニング 活用の実態と課題に関する研究

—全国保育士養成協議会研究発表論文集を対象として—

The Current Situation and Problems of Active Learning in ECEC Teachers' Education
-Target to the research papers of Japanese Nursery Teacher Training School Council-

上田 敏丈・勝浦 眞仁・加藤 信子・加藤 望・

青木 文美・上村 晶・水落 洋志・太田早津美

Harutomo UEDA・Mahito KATSUURA・Nobuko KATO・Nozomi KATO

Fumi AOKI・Aki UEMURA・Hiroshi MIZUOCHI・Satsumi OTA

Studies in Humanities and Cultures

No. 28

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 28号

2017年7月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN

JULY 2017

〔学術論文〕

保育者養成校における

アクティブ・ラーニング活用の実態と課題に関する研究

ー全国保育士養成協議会研究発表論文集を対象としてー

The Current Situation and Problems of Active Learning in ECEC Teachers' Education

-Target to the research papers of Japanese Nursery Teacher Training School Council-

上田 敏丈・勝浦 眞仁・加藤 信子・加藤 望・
青木 文美・上村 晶・水落 洋志・太田早津美

Harutomo Ueda・Mahito Katsuura・Nobuko Kato・Nozomi Kato

Fumi Aoki・Aki Uemura・Hiroshi Mizuochi・Satsumi Ota

はじめに

1. 保育者養成校におけるALの実態
2. 研究の方法
3. 研究結果
 - 3-1. ALの出現割合の年次的変化
 - 3-2. ALのタイプ別出現割合の年次的変化
 - 3-3. ALの科目別出現割合の年次的変化

4. 総合考察

おわりに

要旨 本研究は、保育者養成校におけるALの活用の実態を明らかにするために、平成18年から平成27年にかけての「全国保育士養成協議会研究発表論文集」を対象に分析を行った。その結果、研究報告としては年次ごとに増加していること、教科目として従来から演習科目に集中していることが明らかになった。

キーワード：アクティブ・ラーニング、保育者養成、授業研究

はじめに

本研究の目的は、保育者養成校におけるアクティブ・ラーニング（以下、ALと略記する）の効果的な活用方法を探求していくために、これまで保育者養成校では、どのような主体的学生参加の方略が用いられてきていたのか、その現状の把握と課題を明らかにすることにある。

文部科学省（2012）によれば、ALとは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称であるとされる。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。その中には発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれる。ALは、従来の講義を中心とした受動的学習から能動的学びへの質的転換を図る方策として高等教育機関に推奨されており（中教審，2012）、講義内でのグループディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等を中心に取り入れられてきている。

ここ数年の間に、ALが高等教育機関に浸透し始め、徐々に講義や演習で実施されつつある。しかしながら、教員の負担増など、ALの失敗事例の報告もなされてきている（東海Aチーム，2014）。ALを実施する上での具体的な方略や、また、その評価のあり方については十分に議論が尽くされているわけではない。

特に保育士や幼稚園教諭を目指す学生を教育する保育者養成校においては、ALについての議論がほとんど進んでいないのが現状である。そもそもALの浸透する以前から、表現や演習系の科目を中心に、学生の能動的学修が行われていると見る向きもなくはない。しかしながら、哲学者の西（2015）が「アクティブな主体になるっていうのはけっこう大変だと思う」と述べているように、何をもってアクティブな学びであるとするかは大変難しい。ただスタイルだけを形式的に取り入れた表面的なALでは意味がないのである（綾，2015）。学生たちを能動的な学修へと導く、講義や演習における授業上の工夫はいかになされているのであろうか。まず保育者養成校において、ALを目指した講義・演習上の工夫がいかになされてきたのかを概観していくこととする。

1. 保育者養成校におけるALの実態

保育者養成におけるALをテーマとした論文は、文部科学省が推奨し始めた2012年以前にはほとんど見当たらない。しかしながら、ここ数年の間に、保育者養成校で行われたALに関する実践論文がわずかながらも出てきている。その内容は授業研究、特に実践的な科目である、実習指導（事前・事後）・保育内容（5領域）、また演習科目（保育・教職実践演習、障害児保育など）の実践論文が挙げられる。

まず実習については、事前・事後指導でALを活用している実践が見られた。和田・君島・青木ら（2013）は、保育実習指導と2年・3年ゼミをリンクさせ、それにおいて問題解決型アプローチとホールシステム・アプローチをミックスした各種のプログラムを試行し、学生の能動的な学びを引き出したとしている。また松田・渡邊（2017）は、ポスターやグループワークを用いた協同学習による事後指導を行い、学生の実習の振り返りをより深いものとしたという報告をしている。

次に保育内容については、各領域での実践が見られた。坂倉（2016）は、保育内容環境の授業において、生活に身近な素材である紙コップを用いた遊びによるALを試みている。グループ毎に遊びを創造し、学生同士の相互評価を行っている。その活動から環境という概念のコンセプトマップ

の活用を提唱している。小田 (2016) は、保育内容健康において、ダンス指導により主体性・共同性を深める AL を試みている。その結果、健康のみならず、表現の領域ともリンクさせた実践になっている。高杉 (2015) は食育のゼミにおいて、大型紙芝居を製作、発表し、保育内容言葉の内容ともリンクさせた AL の実践を行っている。また表現の領域で、演劇教育に活かした AL の実践もあった (直井, 2015)。

加えて、演習科目における実践としては、保育・教職実践演習の中でグループディスカッションやロールプレイが試みられていた (加藤・田野・中島ら, 2015)。さらに障害児保育の演習の中で、保育者役、子ども役を決め、指導案に基づいた遊びの模擬保育を行う実践も行われていた (村田, 2015)。他にも講義科目の保育原理の中で、質問と対話により講義を展開していった試み (岡田, 2014) や、附属園との連携や研修に AL を活かした実践もあった (村瀬・鄭・大野, 2014 ; 瀧川, 2015)。

AL の実践研究についてここまで述べてきた。実習指導と保育内容、および演習科目といった領域での実践が多く取り上げられており、AL が実践しやすい内容であったと言える。その一方で、他の保育領域の AL の実践論文をほとんど見つけることはできなかった。上述の実践以外にも、実際に AL を活用している授業科目は多くあるのではないだろうか。特に、演習・実習科目が多い保育者養成においては、授業形態の多様性を踏まえると、授業の中で AL を意識することなく取り入れている場合もありうるだろう。現状では、保育者養成校における AL 実施の全体像がいまだに見えてこない。

保育者養成校における AL の授業実践の全体像をいかに把握していくのか。この問いに対して、筆者らは保育者養成校における授業実践の実態を最もよく表しているものとして、「全国保育士養成協議会研究発表論文集」に着目した。この中にある「授業研究」において、AL の取り組みが数多く発表されている。それらの AL 実践を丁寧におさえていくことによって、保育者養成校の AL の実態、その教育方法を把握することが可能になると考えられる。

幼児教育においても AL が注目されつつある現在、保育者養成校の教員にとっては、AL への理解を深めていくことがますます求められている。それとともに将来の保育者である学生たちにとっても、AL による教育を実際に受講し、その教育方法への理解を進めておくことが役に立つときが来ると考えられる。そのためにも、保育者養成校における AL の実態を把握しておく意義はあるといえよう。

そこで本稿では、「全国保育士養成協議会研究発表論文集」の「授業研究」の研究発表を概観することを通じて、保育者養成校における AL の取り組みに関する全体像や具体的な実践例を明らかにすることを目指した。

2. 研究の方法

本研究は、保育者養成校の AL の実態やその教育方法を把握することを目的とし、なかでも、各

授業における教育方法やALの実施に着目した。研究対象は、平成18年から平成27年までの10年間に発行された「全国保育士養成協議会研究発表論文集」のうち、「授業研究」に掲載された授業内容を扱った研究発表とした。ただし、授業科目名が抄録に掲載されていない研究発表、二科目以上の授業にまたがった研究発表、学校行事を研究対象とした研究発表は、分析対象から外した。また、研究対象となる研究発表からAL実施の有無を抽出し、ALの実施が認められない研究発表は分析の対象外とした。その結果、ALの実施が認められた研究発表は333件であった。

分析に用いた基礎項目は、「発表年度」「発表番号（論文集記載の番号）」「発表タイトル」「授業スタイル」「授業科目分類」「ALの有無」「学習形態」「主導形態」とした（表1）。特に「授業スタイル」については更に細分化し、1. 講義、2. 演習（内容・方法）、3. 演習（表現・技術）、4. 実習事前事後、5. ゼミ・卒論、6. 教科複合型、7. その他（判断のつかないもの）の7項目に分類した。細分化するにあたっては保育者養成課程における独自科目を考慮し、予備分析を通して独自に項目を考案した。細目中の2. 演習（内容・方法）は保育内容及び保育方法の指導に関する授業を、3. 演習（表現・技術）は身体表現・造形表現・音楽表現またはそれらの技術習得の為の授業を指し、4. 実習事前事後については保育実習・教育実習の事前事後指導を、6. 教科複合型は複数の教科にわたる授業において、ひとつの活動を行った授業を指す（例えば、「保育内容 身体的表現」と「保育内容 音楽的表現」の両授業においてミュージカルというひとつの活動を行うような場合）。「学習形態」および「主導形態」については、溝上（2014）による「アクティブ・ラーニング型授業のさまざまな技法と戦略」に基づき、前者は「受動的学習」「能動的学習」の2つに、後者は「教員主導型」「教員主導・講義中心型」「学生主導型」の3つに分類した（表2）。なお、研究対象の抽出及び、分析については、平成18年から平成27年までの各年をそれぞれ一名の研究者が担当し、分析結果の整合性を別の研究者が確認することとした。

表1. 分析表(基礎項目)								
No.	年度	発表番号	発表 タイトル	授業 スタイル	授業科目 分類	AL(1/2)	学習形態	主導形態
					授業スタイルの分類: 1. 講義 2. 演習(内容・方法) 3. 演習(表現・技術) 4. 実習事前事後 5. ゼミ・卒論 6. 教科複合型 7. その他(判断つかないもの)			

表2．アクティブラーニング型授業のさまざまな技法と戦略

タイプ	タイプ0	タイプ1	タイプ2	タイプ3
学習の形態	受動的学習	能動的学習	能動的学習	能動的学習
構図A/B	－	構図A	構図B	構図B
主導形態	教員主導型	教員主導・ 講義中心型	教員主導・ 講義中心型	学生主導型
伝統的講義 に対するア クティブ ラーニング 型授業とし ての戦略性	－	低	中～高	高
技法・戦略	<ul style="list-style-type: none"> ・話し方（声の大きさやスピード） ・板書の仕方 ・パワーポイントのスライドの見せ方 ・実物やモデルによる提示 	<ul style="list-style-type: none"> ・コメントシート/ミニツツペーパー（大福帳/何でも帳など） ・小レポート/小テスト ・宿題（予習/演習問題/e-Learningなど） ・クリッカー ・授業通信 	<ul style="list-style-type: none"> ・ディスカッション ・プレゼンテーション ・体験学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・協同・協調学習 ・調べ学習 ・ディベート ・LTD話し合い学習法 ・ピアインストラクション ・PBL ・PBL ・チーム基盤学習 ・IBL ・ソクラテスメソッド ・ケースメソッド ・発見学習 ・ピアラーニング ・FBL ・加速度学習 ・BLP ・反転学習
				溝上(2014) p.74より

それぞれの研究者が各年の分析作業を進めたところ、保育者養成校で行われる製作や実習指導、模擬保育などの教育方法は、溝上（2014）の分類方法に沿って分析すると分類不可の項目が頻出すると分かった。そこで、分析方法の細分化を図るために、①授業方法が学生「個人」を対象としているか「協同」することを対象としているか、②AL 期間が1回の授業で実施する「短期」AL であるか複数回の授業で実施する「長期」AL であるか、という二つの視点を設け、「1. 教師主導型

AL」「2. 学生個人短期完結型AL」「3. 学生個人長期完結型AL」「4. 学生協同短期完結型AL」「5. 学生協同長期完結型AL」の5つの主導形態で分類することとした(表3)。なお、分析作業は共通の入力シートを用いた。

表3. AL分類				
1. 教師主導型 AL	2. 学生個人短期完結型AL	3. 学生個人長期完成型AL	4. 学生協同短期完結型AL	5. 学生協同長期完結型AL
話し方	コメントシート	卒論・大型紙芝居・エプロンシアター等90分以上とする	模擬保育	模擬保育
板書の仕方	小レポート		プレゼンテーション	プレゼンテーション
PPTのスライドの見せ方	宿題		体験学習	体験学習
実物やモデルによる提示	クリッカー		ディベート	ディベート
授業通信(VTR)	ミニッツペーパー		ピアインストラクション	ピアインストラクション
先輩(上級生や保育者等)の話を聞く	ピアノ(個人)		ピアラーニング	ピアラーニング
	1人製作(造形・ペープサート・指導案)等		ディスカッション	ディスカッション
			調べ学習	調べ学習
			共同・協調学習	共同・協調学習
			PBL(problem)	PBL(problem)
			チーム基盤学習	チーム基盤学習
			LTD	LTD
			IBL	IBL
			PBL(project)	PBL(project)
			ソクラテスメソッド	ソクラテスメソッド
			ケースメソッド	ケースメソッド
			発見学習	発見学習
			FBL	FBL
			加速度学習	加速度学習
			BLP	BLP
			反転学習	反転学習

分析は、①ALの出現割合の年次的変化((各年度のAL出現科目数/全年度のAL出現科目数)×100と、②ALのタイプ別出現割合の年次的変化((各年度のAL出現タイプ数/全年度のAL出現タイプ数)×100)を算出し、平成18年～平成22年までのAL出現タイプ数の合計割合と平成23年～平成27年までのAL出現タイプ数の合計割合を算出し、比較を行った。同様に、③科目別のALの出現割合の年次的変化も算出し、比較検討した。

3. 研究結果

本研究の目的は、「全国保育士養成協議会研究発表論文集」の「授業研究」の研究発表を概観することを通じて、保育者養成校におけるALの取り組みに関する全体像や具体的な実践例を明らかにすることであった。これらのことを明らかにするため、以下の3つの視点から分析を試みた。

3-1. AL の出現割合の年次的変化

AL の年次的変化を検討するため、平成 18 年から平成 27 年にかけての AL の出現割合((各年度の AL 出現科目数/全年度の AL 出現科目数) $\times 100$) と、累乗近似曲線及び R^2 値を算出した。まず、平成 18 年から平成 27 年にかけての授業研究総発表数は 762 であり、その中で AL の出現が確認された発表数は 333 発表であった。この 762 発表を全年度における AL 出現科目数として捉え、各年次における AL 出現数を全年度出現数で割ることで、各年次における AL 出現率を算出した。

その結果、平成 23 年は若干他の年度よりも出現割合は突出しているものの、年次的に AL を含んだ授業が増加傾向 ($R^2 = 0.73$) であることが示された(表 4・図 1)。

表 4 各年度における AL 出現科目数及び授業研究総発表数

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
AL 出現科目数(n=333)	14	26	25	29	34	56	34	33	37	45
授業研究総発表数(n=762)	21	116	68	93	55	81	75	82	72	99

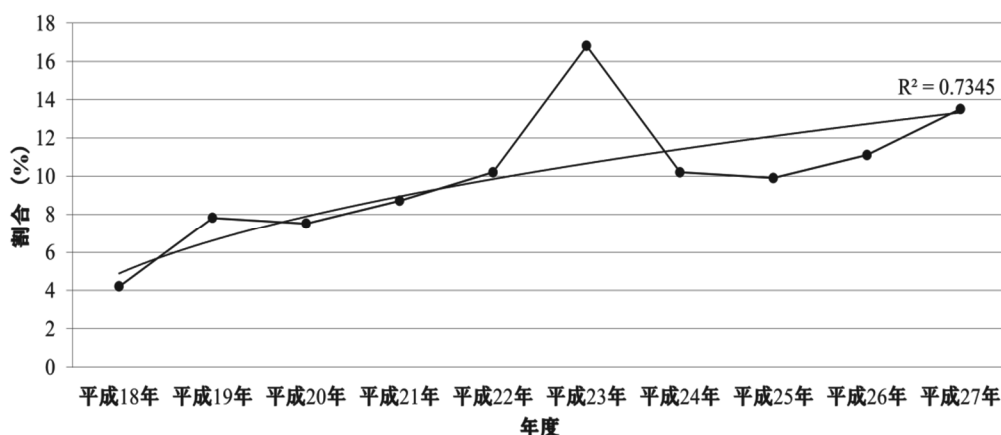


図 1. AL の出現割合の年次的変化

3-2. AL のタイプ別出現割合の年次的変化

AL のタイプ別出現割合の年次的変化を検討するため、各年度別に AL の各タイプ別出現数を算出した。次に、大学における AL を取り入れた教育方法が推奨されはじめた平成 23 年を基準に、平成 18 年から平成 23 年 (H18-23) 及び平成 24 年から平成 27 年 (H24-27) に分類した(表 5)。その後、AL の出現が確認された 333 発表を分母とし、上半期/下半期ごとのタイプ別の合計を分子として平均タイプ別出現割合を算出した(図 2)。

その結果、教師主導型の出現割合はもともと少ない出現割合ではあるが、H18-23 から H24-27 にかけて低下傾向を示し、それ以外のタイプの出現割合は増加傾向であった。その中でも特に、学生協働長期完結型が他のタイプよりも著しい増加傾向を示した。

表5：AL タイプ別科目数一覧（N＝333）

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	上半 期総 数	H24	H25	H26	H27	下半 期総 数
教師主導型	0	2	1	1	3	0	7	0	0	4	1	5
学生個人短期完結型	1	7	2	17	8	7	43	10	11	12	12	45
学生個人長期完結型	0	2	1	1	3	7	14	2	1	4	1	8
学生協働短期完結型	13	2	3	0	12	9	39	9	11	2	21	43
学生協働長期完結型	0	13	18	9	8	33	81	12	11	15	10	48
全 AL 出現科目数	14	26	25	29	34	56	184	33	34	37	45	149

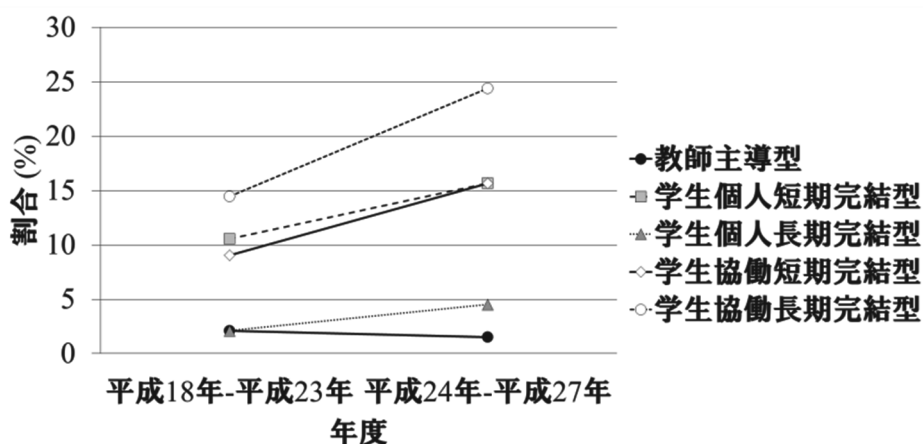


図2. ALのタイプ別出現割合の年次的変化

3-3. ALの科目別出現割合の年次的変化

ALの科目別出現割合の年次的変化を検討するため、平成18年から平成27年にかけてのALの出現割合を算出した(図3:算出割合上位5つを枠で囲った(総合表現とゼミ系:同率))。その結果、年度に関わらず、講義系科目よりも演習系科目及び実験・実習・実技系科目において、ALの出現割合が高いことが示された。

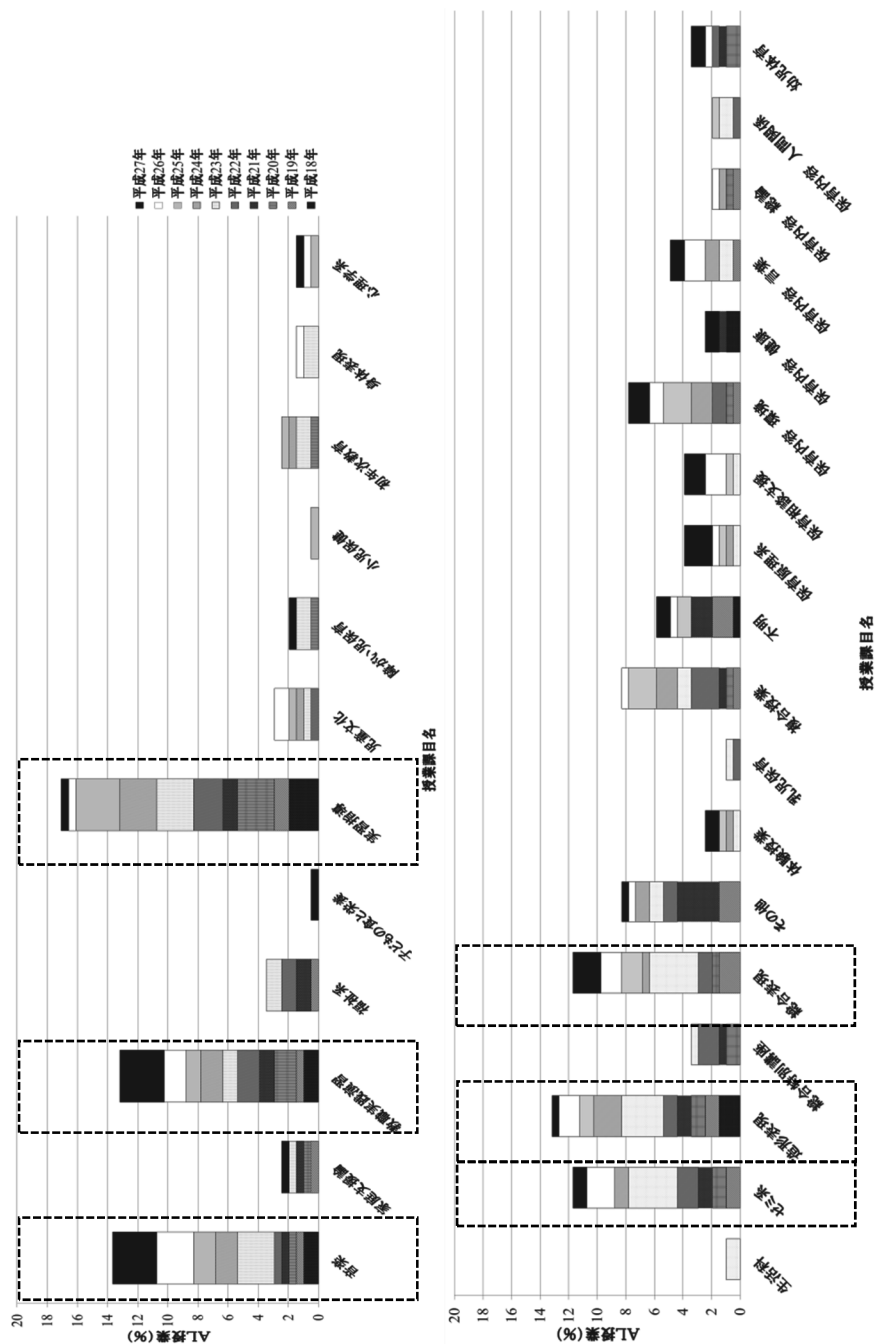


図3. ALの科目別出現割合の年次的変化

以上の結果から、保育者養成校では、年々、AL の出現割合が増加傾向にあることが示された。さらに、タイプ別で見た場合、複数で協力しつつ思考しながら主体的に学ぼうとするタイプが多くなること、科目別では演習科目が年に関わらず多く存在していたことが示された。

4. 総合考察

これまで、保育者養成校におけるAL活用の実態について、「全国保育士養成協議会発表論文集」を対象とした分析で明らかにした。これらを踏まえて以下の点を指摘する。

1) 保育者養成校におけるAL活用の実態

10年間の要旨集を対象としたAL発表件数の推移から、その発表数が年次毎に増加していることが明らかになった。ただ、これは保育者養成校における授業内でのAL活用の増加を意味しているものではない。

特に文部科学省からALが推奨され始めた平成23年度以降は、大学教員のALに対する認識が高まり、社会的必要性も感じることから、増加した傾向にあると考えられる。ただし、AL活用への認識自体が高まったことは、各保育者養成校における授業の中での取り組み数も増えていることが推察される。ただし、表4で現れているように平成23年度のみ突出しているのは、はじめにでものべたように、ALが推奨され始めた年度であるため、着目されていたのか、単に誤差の範囲であるのかは本研究からは判断ができないため、今後の課題とする。

2) 科目別にみるAL活用の実態

科目別にみた場合、「音楽」「造形」「実習指導」などの演習系科目にAL活用の研究報告が集中している。これは、ひとつには劇発表やグループ製作、模擬保育など、AL的な研究報告が多いこと、また、そのような授業実践の蓄積があることから、ALの認識が広まったときに、あわせて報告されやすかったことが原因として考えられる。

ただし、これらの活動は、学修者の「能動的な活動」であることは間違いなが、それがどのような「能動性」をもったものであるのか、それらの活動がどのような学修者の「学修」と繋がっているのかについては、十分に検討されていないものがほとんどであった。授業におけるAL活用については、今後、それらのALがどのような学修と結び付くのか、またその力が保育者養成として、どのように寄与するものであるのかを明らかにしていくことが必要であろう。

同時に、これまで教師の一方的な講義であると考えられる「保育原理系」や「心理学系」の科目においても、近年、AL活用の研究報告が僅かではあるがなされてきている。これらの教科目においても、どのような学修と結び付くのかを明らかにすることが求められる。

おわりに

本研究は、保育者養成校におけるALの活用の実態を明らかにするために、ここ10年間の「全国保育士養成協議会研究発表論文集」を対象に分析を行った。その結果、研究報告としては年次ご

とに増加していること、教科目として従来から演習科目に集中していることが明らかになった。しかしながら、本研究はあくまで発表論文集を対象としたものであり、AL 活用への関心の高まりが明らかになったものの、必ずしも、保育者養成校における AL 活用の増加を表しているものでないということが限界としてあげられる。保育士養成においては、体験的に学ぶことにより、保育現場で実践できる子どもとの関わり方や、必要な知識や技術を習得しておく必要がある。今後は、この点も踏まえて、保育者養成校における AL 活用の学修成果と保育者養成校における意義について明らかにしていくことが課題である。

引用文献

- 綾牧子 2015 「保育者養成課程における教育方法についてー「アクティブラーニング」をめぐる一考察ー」『教育研究所紀要』24 pp.77-86
- 中部地域大学グループ・東海Aチーム 2014 「アクティブ・ラーニング失敗事例集ハンドブック」 文部科学省「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」 pp.8-11
- 中央教育審議会答申 2012 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」中央教育審議会
- 坂倉真衣 2016 「アクティブラーニングを取り入れた保育内容環境の講義ー「紙コップを用いた遊び」を考えるー」『九州竜谷短期大学紀要』62 pp.81-95
- 加藤和子・田野大河・中嶋恵・飯島典子・佐藤万利子・石森真由子・小野真喜子・松村万里子・木村昭代 2015 「保育実践力を育成するアクティブラーニング」『聖和学園短期大学紀要』52 pp.1-6
- 松田千都・渡邊慶一 2017 「アクティブラーニングを活用した保育実習事後指導ー保育実習Ⅰの学びを促進する協同学習の取り組みー」『京都聖母女学院短期大学研究紀要』46 pp.32-46
- 溝上慎一 2014 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂
- 文部科学省 2012 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）」用語集
- 村瀬鮎美・鄭天霞・大野歩 2014 「大学教育と附属園の連携に関する一考察：アクティブラーニングを活用した学生と保育者の学び合いを通して」『教育実践総合センター紀要』32 pp.173-186
- 村田カズ 2015 「発達を促す遊びを立案し実践する授業ー保育科生を対象としたアクティブ・ラーニングの試みー」『聖徳の教えるむ技法』10 pp.93-104
- 直井玲子 2015 「アクティブラーニングの手法としての演劇教育の応用可能性：保育学生に「保育内容」をどのように教えるのか」『松山東雲女子大学人文科学部紀要』23 pp.55-66
- 西研 2015 「第2回『問題解決学習』ーその本質とは何か」『教哲研 HP (<http://kyoutetsuken.net/tedan2.htm>)』(2017.2.23 取得)
- 小田ひとみ 2016 「保育者養成における授業内でのアクティブラーニングの実践ー「保育内容・健康」の授業内での学びー」『女子体育』58(8・9) pp.82-87
- 岡田耕一 2014 「質問と対話による授業…保育科生にふさわしいアクティブラーニングを目指して…」『聖徳

の教え育む技法』9 pp.107-127

高杉志緒 2015 「保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告（第4報）平成24年度の大型紙芝居製作・発表を中心に」『下関短期大学紀要』34 pp.1-18

瀧川光治 2015 「写真を活用した保育の振り返りと園内技法の手法の提案：アクティブラーニング型園内研修の1つとして」『大阪総合保育大学紀要』10 pp.287-297

和田明人・君島昌志・青木一則・米山珠里・日野さくら 2013 「保育者養成におけるアクティブ・ラーニング」『東北福祉大学研究紀要』37 pp.57-71

附記

本研究の分析、検討については著者全員で行ったが、執筆は、「はじめに」「1. 保育者養成校におけるALの実態」を、勝浦・加藤信子が、「研究の方法」を加藤望・青木が、「研究結果」を上村・水落が、「総合考察」「おわりに」を上田・太田が担当した。

また、本研究は全国保育士養成協議会中部ブロックにおいて、平成27年度ブロック研究助成金を受けて行われた研究である。